

『教会が活気有る』

共同体になるには

協力司祭 上村 勉

今日では、幸いにも信徒の養成が盛んになり、それぞれの生き方の身分の独自性と素晴らしさを相互に理解し合うような連携があります。教会の中における交わりと相互関係は決して一方通行ではありません。この新しい教会的な交わりの雰囲気の中で、司祭、修道者、信徒は互いに無視したり、あるいは、せいぜい共通の活動のためにだけ一緒になるというのではなく、今一度、適切な交わりの関係を見出し、福音的な交わりを新たに体験し、相互にカリスマを尊敬し合って、その違いを互いに尊敬しながら補い合うような関係に到達するのです。(キリストからの再出発67〜68)

共同体を育む

小教区の地区別グループや活動グループなどで生活の見直しと分かち合いを重ねていくことが大切である。愛のステップを一つ一つ深めていくことで、時間はかかる

が、確実に共同体を育むことができる。①出会い、②分かち合い、③支え合い、④折り合い、⑤チャレンジし合い、⑥派遣し合う。教会に共同体を育み、教会を基軸として共同社会を築くためには、出会いを大切にして、その人と交われば、「分かち合い」が生まれ、苦しみの時や痛み、それは「支え合い」に発展し、やがて、その人の心が心の中に、いつも思い浮かぶようになり、「折り合い」へと導かれる。その人がキリストに、より近く生きていけるようにと、本人が気付かない不自由さに、あえて光を当てて自由になれるようにと、互いに「チャレンジし合い」、そして、キリストの道具として、互いに「派遣し合い」、神の国の建設に共に関わるといった共同体が深まるステップを歩むこと、それぞれのステップに「赦し合い」という隠し味が必要であります。

隠し味としての「赦し合い」

共同体を「派遣し合う」関係にまで深めようとする力は、確かに働いています。それを妨げようとすると、力も働いていないことに気付

かされます。人の輪が共同体へと深まっていく、いずれの段階にも、育まれた関係を危機に陥らせる力が働くのです。それは「裁き」です。人は神の裁きの前に進みますが、人の裁きは耐え難いほど人格を痛めつけます。共同体を「派遣し合う」関係にまで深める時の隠し味は「赦し合い」であり、「赦し合い」こそが私たちの教会共同体に集う者たちの本質でもあるのです。六つの「あい」それぞれの段階で、人々の心の有様が「赦し合い」で満たされていけば、必ず共同体は深まっていくのです。

私たちの信仰は、キリストの愛によって特徴付けられます。キリストは出会う人々全てに良い知らせである福音を伝え続けました。十字架の上でさえ、罪人に対して神に祝福される者だから、神に立ち返れば、天国で永遠に住まうことができますことを説いています。私たち一人一人は神によって造られた傑作であり、命をいただいたことそのものが神の祝福であるという信仰を持っています。

